

九州聴覚障害者団体連合会創立70周年記念

第66回全九州ろうあ者大会 ～70年の歩みを糧に新しき歴史を創ろう～

聴覚障害者問題にかかわる研修会・第45回全九州手話通訳者研修会

今年もあと残すところ1か月となりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。さて、今回の「はっけん」は、9月8日(金)～10日(日)に熊本県立劇場演劇ホール、熊本学園大学で開かれた上記大会のレポートを紹介します。

聴覚障害者問題に関わる研修会 共通研修会

「九州聴覚障害者団体連合会70年の歩み」

講師：松永 朗氏（九州聴覚障害者団体連合会理事長）

九聴連の70年間。松永氏が九聴連の運動に関わったのは創設17年目以降。それ以前のことは分からないことも多いが、先輩たちに教わったことも含めて話したいと前置きして語られた。

昭和22（1947）年5月24日に全日本ろうあ連盟が創設。同じ年の10月22日、福岡ろう学校で九聴連の前身である全九州聾啞連盟が創設された。船津義則委員長（福岡）、土屋準一副委員長（大分）。当時、九州全県に1県1ろう協会ができていたわけではなく、船津、土屋両氏は、それこそ自腹を切って未設立の県に協会設立を働きかけて回られた。昭和24・25年頃、1県1ろう協会が出そろい九聴連に加盟して組織が整った。

組織が整ってきたことから野球大会を開いた。その後、種目の改廃もありながら現在の全九州ろうあ者スポーツ大会につながってきている。

昭和26年に熊本ローア会館の建設。その後、中央の国立ろうあ更生指導所の開設、障害福祉年金の発足等に呼応して、地方でもろうあ会館建築をはじめとした要求が活発になり、会員も増加、結束も強くなった。

昭和30年代の大分における聴力障害者授産場、福岡のろうあ会館建設、長崎での公共施設内へのろうあ協会事務所設置へとつながっていった。

昭和41年2月、沖縄県協会が加盟。九州がひとつにまとまった。同年、京都での第1回全国ろ



うあ青年研究討論会を契機に、ろう運動は「差別に反対し権利を守る」運動として展開されるようになった。高度経済成長のなかで、保障水準の引き上げ、公害問題等に対する民衆運動が台頭し、人権意識も高まっていったことに触発されている。

昭和42年、宮崎市役所にろう者相談員が設置され、鹿児島、長崎、福岡、大分へと波及していった。

昭和45年、手話奉仕員養成事業が開始。46年に手話通訳者研修会が開始され、49年に九州手話通訳者団体協議会（現在の九州手話サークル連絡協議会）が発足した。

昭和46年第1回ろうあ者福祉問題懇談会を開いてから、各県持ち回りで第8回大会まで開催。福祉・教育・道交法・職業関係について論議した。ろう学校の教育方法、手話の必要性について激論が交わされたこともある。51年の沖縄での第6回懇談会の際は、鹿児島から沖縄への船上で常任委員会を開き、現地に着いてから関連する会議を開いたりもした。

昭和47年、福岡において運転免許取得が成功。翌年には全国に波及し、「補聴器付きで可能」という成果をもたらした。

昭和52年2月6日、「全九州聾啞連盟」を「全九州ろうあ連盟」に改称。

昭和50年、国連において「障害者の権利宣言」が採択。全国的に通訳制度の確立、民法11条の改正等を求めた署名運動に取り組む。九聴連として20万人の署名を集めた。

昭和60年から全国的に「アイラブコミュニケーション」パンフレット普及運動を開始。62年には120万部普及という目標を達成。九聴連加盟8団体も目標を達成した。

平成2年、視聴覚障害者情報提供施設建設が法制化。九聴連としても26年までに全県設置を目標とした。

平成4年6月1日、「全九州ろうあ連盟」から「九州聴覚障害者団体連合会」と改称。

九聴連のこれまで70年間の活動について誇りをもって語られた。創設から40年間程度の話が中心であった。ここに報告しきれないことが、たくさんある。それだけ、今日の組織・運動の基盤作りのための活動が大変だったのだろうと感じた。

講演のむすびの「昭和22年は、終戦2年目である。国内のほとんどは、衣食住に貧困と物不足、福祉は皆無状態であった。こんな中で、自腹で連盟を立ち上げ、ろう者の福祉や権利保障などを無からスタートさせ、今の状態を築いた。その苦労は並大抵ではなく想像を絶する計り知れないものがあつたと思う。この志を我々が引き継ぎ、当時の人たちの願いを実現させることが、我々に課せられた務めと思う。」という松永氏の言葉を重く受け止めていきたいと思う。

※ 日本聴力障害新聞のことも語られた。たくさんの方に読んでほしい。ただ、聴覚障害者の中には、文章が苦手だからと言って日聴紙を敬遠している方も多い。サークルの時に会員が内容を説明（解説）したり、分からない手話表現があつたら教えてもらったりしてお互いに学び合い、力を高めてほしいということであった。

なるほどと思い、早速、先日のサークルでやってみた。時間不足であったが、参加者には、熱心に興味深く日聴紙に接してもらえたと思う。

【鹿児島県（指宿手話サークルなの花） 出森 俊郎】

聴覚障害者問題に関わる研修会 第1分科会「手話」

「ノンバーバルコミュニケーション」

ファシリテーター：庄崎隆志氏（office 風の器主宰・俳優・演出家）
貴田 みどり氏（女優・ダンサー）

全日ろう連創立 60 周年記念映画「ゆずり葉」に出演された他、数々の舞台に立つ俳優であり演出家の庄崎隆志さんが担当されることに興味を持って申し込んだわけですが、どんなワークショップが繰り広げられるのか、楽しみで仕方ありませんでした。しかも、当日資料を見てビックリ。貴田みどりさんも登場する豪華なものでした。

参加者は約 70 名。会場のホワイトボードには「ノンバーバルコミュニケーションの世界へようこそ」の一言。「ノンバーバル=非言語」ということは以前から知っていましたが、今回は非言語にこだわるワークショップのため、なんと手話は最初と最後の説明、休憩の合図以外には使わずに進めていく徹底ぶりに驚きました。

ワークショップは、手を動かすものから始まり、全身を使った動き、複数人で演じるドラマ、全員参加のサイレントオーケストラへと続き、最後はノンバーバル劇「四季」。5つのグループに分かれて、およそ 30 分で春、夏、秋、冬、そしてまた春の表現を組み立てて練習し、発表するというスパルタなワークでした。それでも各グループとも創意工夫に満ちていて、「みんな、すごい」と感じました。

最後に、庄崎さんからのプレゼントともいえる「手の詩(うた)」では、「男と女の出会い」とチェロマイム「うみ」の 2 つの演目を披露してくださいましたが、とにかく素晴らしいの一言につきるひとときでした。特に、「うみ」では、「海はひろいな、おおきいな♪」というメロディが聞こえてきそうなチェロ演奏の pantomime から始まり、大海原へ漕ぎ出す小舟、潜水する人、その人が見た海の底の世界。まるでテレビのように切り替わる表現に、涙が出そうなくらいに感動してしまいました。

庄崎さんの「ノンバーバルから始まって、それから手話」という言葉の深さと重みがズシンと心に響く、大満足の分科会でした。

【福岡県（北九州市手話の会） 赤嶺 寛徳】

聴覚障害者問題に関わる研修会 第2分科会「文化」

「ろう者の文化は…」

講師：マーティン・デールヘンチ氏

講師のマーティン氏はアメリカのミシガン州出身の 29 歳。両親は聴者であるが、障害者への理解があり彼の障害を自然に受け入れられたという。両親共に手話ができ、彼が幼い頃は自宅に大人のろう者が時々遊びに来るといった環境で育った。地域の学校へ通うが、全校生徒 1500 人中ろう者が 10 人。彼は通訳士付きで授業を受けていたようだ。手話を母語とし英語の読み書きも学んでいった。そんな彼は映画好きの父の影響で、幼いころ黒沢映画を見て日本へ興味を持ち始め、16 歳の時、交換留学のプログラムで 6 週間、長野のデフファミリーのお宅へホームステイをした。それが殊の外楽しかったらしい。その後ギャロデット大学へと進学。卒業後の進路を考えていた時、日本のこ

とを思い出し行くことを決意。日本 ASL 協会に採用され来日。その後フリーランスとなり、英語教師や翻訳のなどをしている。と、彼の自己紹介から始まり、次にアメリカのろう歴史の話となった。

アメリカで牧師のギャローデットが、一人寂しそうにしていたろうの少女にも教育を受けさせたいと思いヨーロッパへ渡るが、最初の寄港地のイギリスでは冷たく厳しい口話教育がなされており、フランスへと渡る。そこでは手話で教育がなされており、彼はそこで出会ったろう教師をアメリカへと連れ帰った。そこからアメリカでのろう教育が始まり、アメリカの指文字はフランス手話の影響を受けているとのことだった。

そして、アメリカと日本の文化や制度の違いへと話は展開していった。彼が日本へ来て一番驚いたのは日本のタクシー運転手。制服を着用し手袋までして丁寧な対応である。アメリカのドライバーは身綺麗ではなく、ガムを噛んでいるし。日本のタクシーはリムジン並みだと話していた。彼の妻は日本人だが、妻の両親への挨拶や法事など、アメリカとの違いに戸惑ったらしい。運動会もそうだ。アメリカにはそういうものはない。そして運動会でやるラジオ体操を老若男女だれもができることに驚愕。また不思議だったのが笑い方、なぜ日本の女性は口を押さえて笑うのか。これらは、ろう者に限らず他の外国人も感じていることかもしれない。ギャローデット大学では、ろう学生は楽しい時、机を叩くそうだ。これは相手の話がどれだけ面白いかという意思表示だと言っていた。しかし日本でこれをやったら怒っていると誤解されたい。文化の違いとは面白いものである。

制度については、アメリカには ADA 法（障害を持つアメリカ人法）があり、電話リレーサービスは 20 年前から行政がお金を投入し行われている。しかし日本のように電車や施設拝観料の割引などはないらしい。年金制度はアメリカにもあるが州によって金額が異なる。ろう者の雇用率（実質 20～30%）は低く年金生活者が多いとのことだった。ちなみに就職先は、ろう学校の教師や自営が多いとのこと。

アイデンティティーの問題では、アメリカ人の中には手話に誇りを持っている人もいれば、そうではない人もいる。教育法ではアメリカでも医学的立場の考えとアイデンティティーを持ったろう者との意見は対立しているらしい。ろうの赤ちゃんには早期から手話を教えるバイリンガル教育がいいのではないかと彼は言っていた。

その他アメリカろう文化のアートやパフォーマンスも紹介してくれ、日本とアメリカの手話表現の違いや、趣味の自転車で日本一周したという話もあった。

マーティン氏の手話は日本人のように流暢で、話に引き込まれていった。講演後は会場から次々と質問が出ていたが、これまた彼が日本手話をよく読み取れるのに関心した。

今や日本のろう者も外国へ出かけたり、普段の生活の中でもチャットで外国のろう者と会話を楽しんだりする人も増えているせいか、参加者だれもが気楽にマーティン氏とのやり取りを楽しんでいるように見えた。

益々外国が近くなった感じがし、楽しい時間だった。

【福岡県（福岡手話の会） 萩原 恵美子】

聴覚障害者問題に関わる研修会 第3分科会「福祉」

「ろう教育の70年とこれから」

講師：久松 三二氏（一般財団法人 全日本ろうあ連盟事務局長）

第1部と第2部の内容で構成されており、テーマの通り、今までのろう教育とこれから考えなければならないことを知ることができました。

第1部では、久松氏から「ろう教育の70年とこれから」という演題で講演が行われました。パワーポイントの資料はたくさん用意しておられたようですが、資料を追った話だけでなく、久松氏の頭の中に入っている知識、経験、思いがどんどん溢れ出すように進んでいき、どんどん引き込まれていきました。明治時代からのろう教育、現在の特別支援教育制度における課題までを自分の経験談などを交えて、分かりやすく解説をしていただいたように感じました。

中でも、ろう学校の生徒減少の理由として挙げられたインテグレーションの話で、東京のろう学校受験で不合格になり、元のろう学校に戻らず近くの学校に通うことになったというご自身の経験のお話しがとても印象的でした。その流れの中には、久松氏の母親がろう学校に不満を持っていたのではないかとということや、教師の「普通の子どもになってよかったね。」という久松氏がひっかかった言葉があったことなども紹介されました。その当時の社会や考えが浮き彫りになるリアルな出来事だなど、とても複雑な気持ちになりました。

現在、インテグレーションをした児童生徒の引きこもりの課題、身に付けさせたい力について多くの課題があることを挙げられ、それらの対策を円滑に進めるためには、手話言語法の制定が重要であることや、一緒に社会を作る者を理解するために手話だけでなく日本語も大事であるとのことでした。

第2部はろう者、聴者が混ざって5人程度に分かれ、グループ討議が行われました。テーマは「人工内耳の手術をした子どもが生きる力を育てるためにどんなことが必要か」でした。生きる力とは、日本語や、考える力など多くの力があると説明を受けたのですが、いざ、討議を始めようとしても、恥ずかしながら自分の考えを出せるほど人工内耳の知識や装用している方の情報を知らなかったもので、話しを伺ったり、質問に答えたりすることに終始しました。

グループ毎に討議した内容を全体に共有する時間では、ある人工内耳の手術をした人の話の紹介、具体的な方法として聞こえる子どもとの交流、また、聞こえる聞こえないに関係なく必要な力である自立、自己決定、善悪の判断、コミュニケーション力、さらには人工内耳のロールモデルの紹介などといった様々な話が出ました。最後に久松氏からのまとめとして、「人工内耳をした人が大人になる。ろうあ連盟としてもサポートをしていきたい。どんなサポートが必要なのか。今、人工内耳が合わない人の例が表れない。公正にチェックできる機能があればよいのでは。」というお話がありました。



【佐賀県 吉田 智穂】

聴覚障害者問題に関わる研修会 高齢部研修会

「昭和時代のなつかしい手話」

講師：那須 英彰氏



講師は NHK 手話ニュースのキャスターとしてもお馴染みの那須英彰氏。山形県出身で、2歳の時に高熱により失聴、インテグレートする友人もいた中、氏は20歳まで山形豊学校に通われたそうです。先輩や高齢者の手話を見ていくうちに、昔と今の手話の違いに気づき、現在、消滅の危機にある高齢ろう者の手話や実態を保存し、継承していく取組に力を注がれています。

時代背景により手話は変化してきました。例えば、「いつ」は、「日めくりカレンダーをめく

る動作」と「いくつ」の組み合わせで表現していたそうですが、日めくりカレンダーが減ったことで手話表現も変わったそうです。また、「まずい」は片手で口を隠し、もう一方の手を口のあたりから下におろす。昔は、食べ物がまずいときは後ろを向いて、こっそり吐き出していたことからこの表現になったと言われました。もし、先人が現在の表現を見たら、失礼だ！と言われるかもしれませんね。ろう学校の木工や理容、被服科から生まれた手話もあります。例えば、「スムーズ」という手話は人差し指で、ほほの揉み上げのあたりから口のあたりまで撫でて表しますが、これはひげを剃刀で剃る動作から来ています。会場からは、「ほ〜っ！」という声や、「そうそう」とうなずく方々も散見されました。分科会で知った手話今昔を紙面の都合で全部ご報告できないのが残念です。

映画が裕福な人の娯楽だった時代、ろう者間で自分が観てきたことをどれだけリアルに伝えられるか、手話の競い合いがあったそうです。映画「ベン・ハー」の一場面を紹介されましたが、私が何十年も前に観た映画の映像がそっくりそのまま手話と表情、身振りで再現され、鳥肌が立つほどでした。映像をそのまま映し出す手話表現のすばらしさを改めて感じました。

80歳を超えるろう者が昔語りで「工場／煙突／たくさん／煙／もくもく」と手話表現されたら、さあ、何と読み取りますか？戦後、焼け野原に工場が建てられ発展したことを表しているこの手話表現、「日本経済が発展した。」と読み取るそうです。

ろう者の失聴の時期や状況、生きてきた時代や環境で手話が全く違う。このことを私たちはしっかりと頭に置き、くりだされる手話を読み取り、またろう者に解る手話表現をしなければならないことを痛感した講座でした。

【福岡県（糸島手話の会） 日下部 賀子】

最初は、那須さんの生い立ちについてのお話でした。1967年に山形県に生まれ、2歳の時に高熱のため全聾になりました。その時から山形県立山形聾学校に通い始めました。当時の聾学校では手話は禁止でした。幼稚部の時は親が付き添うのですが、両親が共稼ぎのため祖母と一緒に通うことになりました。高等部や専攻科の先輩たちに可愛がられ手話を教えてもらい手話でおしゃべりしたことが楽しかったそうです。

次にアイヌ語についての紹介です。アイヌ語は手話と似ている点があります。書き言葉である文字がなく話し言葉だけです。そしてもともとアイヌ語であったものが日本語に取り入れられた言葉「シシャモ・ラッコ・トナカイ・昆布」などがあります。

続いて時代背景による手話の変貌についてです。今皆さんが使っている手話と高齢ろう者が使っていた手話の違いを説明して頂きました。例として「郵便局」です。今の表現は、「郵便局のマーク(〒)と場所」で表現します。昔は「左手の手のひらに右手を握ってスタンプを押すしぐさ」です。また「福祉事務所」今の表現は「福祉と事務所」ですが、昔の表現は「お金+割引+場所」と表現します。ろう者が国鉄の料金を割引してもらう時に福祉事務所に行って手続きをしていたので、このような手話表現になりました。その他「いつ・記念・年齢」など、今の手話とは違った素晴らしい手話を年配の人達は使っていました。また聾学校の理容、木工、被服科から生まれた手話もありました。「木工」では「ピカピカ」の手話です。「上手に鉋掛けができると木の表面がきれいに仕上がりピカピカになる」という意味です。表現は「左手の甲に右手で下手のしぐさ」です。次に那須さんが若い時から各地を訪れ年配ろう者の手話を記録したDVDを那須さんの解説と合わせて観ました。

最後に美しい年配の手話を若者たちへ・消滅の危機にある年配ろう者の手話を保存・継承の取組について。地域のろう協に高齢者の手話を映像として残していると思いますのでそれを大切に保存していくこと。青年部と高齢部が温泉に行くなど、一緒に活動をして手話でお話をすれば魅力的な手話の継承になるそうです。那須さん素晴らしい講演をありがとうございました。

以上で報告を終わります。

【大分県（宇佐手話サークル） 松本 年明】

聴覚障害者問題に関わる研修会 女性部研修会

「いつも笑顔で元気よく ～わたし、仲間、心豊かに～」

講師：藤原 友子氏（公益社団法人 静岡県聴覚障害者協会女性部長）

現在、あらゆる場面で、多くの女性の活躍がみられます。

活動を通して、より知的により感性豊かになるには、どうすれば良いか・・・講師の藤原さんのお話に聴き入りました。ご自身の生い立ち、手話との出会い、現在までの活動の様子等を、時にはユーモアを交えながらお話をしてくださいました。

18歳くらいの時に失聴。その当時は、聞こえないのは、世の中で自分一人だけだと思われていたとか。この頃は「手話」を知らなかったので、コミュニケーションの方法は口話（読唇術）それに筆談と身振りだったそうです。

その後、30歳の時にろう者と出会い、それがきっかけで手話サークルとろうあ協会に入会。手

話を知り、覚えたことで「聞こえない世界と聞こえる世界」の中立的な立場がなくなった事がとても嬉しかったと話されました。又、ろう者と健聴者の両方の気持ちが分かり、いろんな面で視野が広がったそうです。

ろうあ協会に入会した年に、役員会の記録係を担当した時の話をされました。それは役員が話す内容（手話そのものが分からない）が分からない時に「待った」をかけて、その都度教えてもらいながら記録を取ったそうです。当然、会議の進行も非常に遅くなったそうですが、この経験があったからこそ、今の私があるのだと強調されていました。

とても勇気のある行動だと思いました。

常に前向きで、積極的に活動をされている藤原さん。そこには苦しい経験がありながらも「笑顔がいい」「表情が豊か」「元気がある」先輩ろう者の姿があったそうです。

「自分が笑顔で接すれば、相手も笑顔で答えてくれる」これが元気の源なのかと思いました。

誰もがいつも、笑顔を絶やさず、元気で過ごす、仲間がいるからできる事。仲間の力を借りて心を豊かに保つ。人は人とのつながりの中から学び、成長し心を豊かに保っていけるのではないかとの言葉。共感しました。

なごやかな雰囲気の中、楽しく研修会に参加でき「笑顔」と「元気」をもらいました。

【宮崎県（日向手話サークル） 小田 和子】

聴覚障害者問題に関わる研修会 青年部研修会

「アジアと組織～私たちの知らないアジアを知ろう～」

講師：嶋本 恭規氏（一般財団法人全日本ろうあ連盟理事 WFD アジア地域事務長 元青年部長）

「濱川さん、今度の研修会は青年部に参加するの？」

聴覚障害者協会青年部の会員、何人にこの言葉を投げかけられたことか…。四捨五入して年齢50の私がこの分科会に申し込んだ理由は、ここしばらく青年部の活動についてなかなか知る機会がなかったから。さらに、今回はテーマが「アジアと組織」。グローバルなテーマに時代の流れを感じた。

「アジア」についての講演なのだが、そもそも「アジア」とはどの国・地域のことか。私は中国・韓国・

マレーシア・タイ・イランなど東南アジアとか中東とか言われる地域にオーストラリアの辺り（ざっくり過ぎて申しわけない）だと認識していた。が、オーストラリア・フィジーは数年前より「オセアニア」地域として分離したとのことだった。だが、分離したことにより、活動は低迷しているとのこと。トルコは長らくアジアと謳ってきたが、最近では欧州・アジアのいずれかははっきりできない状態。当たり前だが、聴覚障害者の組織も世界情勢と切り離しては考えられないことを実感した。

全世界に視点を移すと、聴覚障害者は7000万人（難聴・中途失聴・高齢難聴者を含む）いるとのこと。うち、手話でコミュニケーションをする割合は3%（210万人）というグラフを見せられた。「思ったより少ないなあ。」と感じた。それもそのはず。少なくとも日本政府は「手話」



を「言語」として認めていない。結果、公的な調査が行われていないということだ。このようにグラフにすると、聴覚障害者はそこに存在しないことになる。嶋本氏はこの調査は今後の課題だと話された。

「世界」「アジア」と聞くと、日本の端に位置する九州人は「自分たちには遠い世界の話」と感じるかもしれない。ところが、[世界ろう連盟アジア青年部]設立のきっかけとなったのは2006年に宮崎で開催された全国ろうあ青年研究討論集会であったことを今回、初めて知った。同時に同地で開催されたアジア青年キャンプで他国のろう者同士が交流する様子を全日本ろうあ連盟の理事に見てもらい、「今後も交流を続けたい」と言う青年たちの思いを政府に届けた結果、各国へはたらきかけることができるようになったとのことだった。

後半は世界手話の学習で、錆びた頭にすべてをインプットすることはできなかった。私とは対照的に、青年たちが真摯に学ぶ姿勢に熱気を感じるとともに、後継者育成を望む嶋本氏の想いも強く感じた。

このところ、九手連の研修会等でサークルの高齢化などの言葉が飛び交うことが多いが、聴覚障害者団体の青年部が活気を持って活動するためには、共に歩む健聴者の青年たちの存在が欠かせないように感じた。サークル活動に若手をどう引き込むか。この問題は聴覚障害者団体の未来も担っている。

【鹿児島県（始良手話サークル かりん） 濱川千鶴子】

手話通訳者研修会 第一講座

講演①「障害者と戦争～ナチス・ドイツにおける障害者迫害について～」

講師：藤井 克徳 氏（日本障害者フォーラム（JDF）幹事会議長・きょうされん常務理事）

講演②「高齢ろうあ者の実態調査から」

講師：長野 秀樹氏（全通研 長崎支部）

【講演①】

「T4 作戦」この作戦名を皆さんご存知でしょうか？

では、「ホロコースト」はどうでしょう。ナチス・ドイツ軍が行ったユダヤ人大量虐殺を指す語であることは皆さんご存知かと思いません。

戻って「T4 作戦」とは。

第2次大戦中のナチス・ドイツ軍による障害者の大量虐殺を指す暗号名で、この作戦はホロコーストの前に行われていたのだということです。

第1講座の1コマ目はこの「T4 作戦」について、実際に虐殺が行われていた地を訪れた藤井克徳さんにお話を伺いました。

ナチス・ドイツ軍の“劣っている人間はこの世に不要だ”とする「優生思想」の基、T4 作戦とい



う名で推計で 20 万人もの障害者が殺されたというのです。

しかも医師や看護師が積極的に関わっていて、殺された人々が焼却されるまでに行われた耳を塞ぎたくなる内容、T4 作戦で使われた殺戮方法は後にユダヤ人虐殺へと引き継がれたというおぞましさ。

もし、この作戦で仮に障害者が全滅したら、高齢者、病人、など弱者探しに発展していく恐れがあった、とおっしゃっていた藤井さんの言葉が私の中で重く響きました。

そして、障害者権利条約についてお話いただきました。障害者権利条約は「全ての障害者は、他の者との平等を基礎として、その心身がそのままの状態尊重される権利を有する(第十七条)」と T4 作戦のベースにあった「優生思想」と対峙するもので、

(1)世界のルール

(2)北極星のような誰もが持てる共通の目標

(3)社会への標準値の取り戻しができるイエローカード だと。

藤井さんは、「行動が大切で、障害者権利条約をもっと広めて欲しい」と結ばれました。私たちが問われているものは、求められているものは何か、考えさせられる講義でした。

【講演②】

2 コマ目は、全通研長崎支部長の長野秀樹さんに高齢聴覚障害者実態調査についてお話をいただきました。

この調査は、聴覚障害者が老後を安心して生活できるための福祉施策を検討するために行われたとのこと。長崎の高齢ろう者が他県の高齢者施設に入居したことが調査のきっかけとなったそうです。調査結果を見せていただきましたが、高齢ろう者の方々の生活が垣間見えるようでした。高齢者が対象のため、対面調査としたそうですが、調査内容には調査する側、される側互いの信頼関係がなければ答えられないであろう内容が含まれていることに驚きました。

また、出来事に対する疑問から問題を抽出し、どうすればよいかにつなげるためへの取り組みに動き出せる組織力に感銘を受けました。

ろう者のための老人ホームや介護施設建設を求める声が全国的に広がっているとは聞きますが、実現に向けた土台作りはどうするのか、具体的にどう動くのかを見せていただけこと、私の住む地域でも…と簡単には言うことは出来ませんが、方向を示してもらえたと感じ、この講座に参加して良かったと思います。



【佐賀県 村田三枝】

手話通訳者研修会 第二講座

講演①「こころに寄り添う～『手話で聴く』臨床心理士の活動を通して～」

講師：井料 美輝子氏（手話通訳士・臨床心理士）

講演②「ろう者から学ぶ手話～その魅力あることば～『サークルに感謝！』私のしあわせ みんなと共に歩いた歳月～」

講師：吉田 弘芳氏（社会福祉法人 大分県聴覚障害者協会会員）

【講演①】

ろう学校スクールカウンセリング、手話サークルでできる心の援助について講演。手話を始めた頃に、ろう講師から「手話ができるカウンセラーはいないから頑張る」と言われたのが活動のきっかけで、今は週に1回、月に1校の間隔でスクールカウンセリングを行っているそうです。カウンセリングは、傾聴（ひたすら聴く）、受容（ありのままを受け入れる）、共感（同じ気持ちになる）することで、気持ちをスッキリさせ信頼関係をうむことで自己肯定感が高まり、気持ちの整理ができ一緒に考えることで本来の力を引き出すことができる。話したいことを手話で話すことで仲間がいることに気づき、気持ちが楽になり自分のことを話すことができる。そして、ろう者がありのままでいられる場所をもっと増やして欲しいと締めくくられました。



【講演②】

大分県聴覚障害者協会会員・中津ろう者劇団「ひまわり」団長・サロンひまわりの種代表の吉田弘芳氏が中津市の紹介を交えながら、自身の活動について講演。奥様とはお見合いで、生年月日・血液型が同じで名前にも「弘」があり運命を感じたそうです。結婚をきっかけに長崎から中津市へ。協会に加入したが活動にさびしさを感じ仲間を誘ったそうです。財政が厳しいと専任手話通訳者が解雇になりそうになった時は、市役所に激しく意見し存続、会社の倒産危機で手話通訳者の有難さを感じたそうです。現在は活動を休止していますが恩返しのつもりで劇団を旗揚げ、高齢ろう者が集まれるためにサロン開設と、常に一生懸命取り組んでいる様子が伝わってきました。最後にパントマイムで締めくくってくれました。



【宮崎県（日向手話サークル） 緒方 嘉代】

創立70周年祝賀会

ANA クラウンプラザホテル熊本ニュースカイにて

9月9日（土）～10日（日）、熊本で九州大会が開催されました。一昨年の大きな地震の痛手もまだ癒えぬ熊本でしょうが、私たちを迎える準備をしてくださったことに、実行委員の皆さんの『よし頑張るぞ！』との強い想いが、ひしひしと伝わってきました。本当にご苦労さまでした。

では、9日の夜の交流会（祝賀会）の様子をお伝えしますと・・・。

会場は大きなきれいなホテル、【ANA クラウンプラザホテル熊本ニュースカイ】という超立派なホテルでした。全日ろう連と九聴連の、創立70周年記念祝賀会も兼ねており、参加費は例年に比べ少し高かったのですが、料理はとても美味しく、進行を青年部が全て担っていたことなどが素晴らしく、来て良かった～と誰彼ともなく握手したい気持ちでした。青年部の皆さんは司会・クイズ・進行を担当し、とても頼もしかったです♡♡♡

クイズはテーブル毎に話し合い答えるもので、熊本に關したものや、くまモンのこと等、普段何気なく見たり聞いたりしていることを、改めて問われ???となりおろおろするばかりでした。

が、テーブル内に熊本の人がいると流石！！すらすら答えてくれました。残念ながら我がテーブルは優勝とはなりませんでしたが、テーブル内で話も弾み、楽しい2時間半でした。

来年はこの集会、長崎で開かれます。実行委員会も立ち上がり、委員一同「長崎に来て良かった～！」と思ってもらえるような集会になるよう、心を込めて準備したいと思っています。

来年は長崎に来んね～～♪



【長崎県（長与手話サークル） 西川 竹美】

第66回全九州ろうあ者大会

第一部「大会式典」

第二部「アトラクション」①ノンバーバルコミュニケーション②くまモン出演③九州学院中学高等学校チアダンス

第一部式典は、九州聴覚障害者団体連合会理事の寿福三男様を司会者に、同じく理事の時松美由紀様が開式の言葉を述べて始まりました。黙祷、地元協会長の福島哲美様の挨拶の後、九州聴覚障害者団体連合会理事長の松永朗様が「九州は一つ」の言葉を合い言葉に大会会長挨拶を行いました。次に感謝状授与で、今年1月にご逝去された前熊本県手話通訳問題研究会会長 梶原初子様（ご主人様が代理）、長年ろう者と共に写真撮影の指導をされてきた写真家の吉岡功治様が授与されました。その後、来賓祝辞では熊本県知事の蒲島郁夫様、熊本市長の大西一史様からお言葉をいただき、来賓紹介、祝電披露と会が進みました。休憩の後、議事に入りました。議事では、平成28年度の事業報告を事務局長の比嘉様が、大会宣言を理事の山本様が、研修分科会報告を同じく理事の福田様が行いました。最後に大会宣言と大会決議を満場一致で採決し、閉式となりました。

第二部アトラクションでは、次のような演技がありました。

1 ノンバーバルコミュニケーション実演

庄崎隆志氏と、貴田みどりさんを招いて、楽しくパフォーマンスをしました。チャップリン風の演技があったり、会場からお客さんを招いて一緒に演技したりと、とても楽しい舞台を見ることができました。

2 くまモン出演

熊本の有名人といえば、くまモン。会場の皆さんと一緒に「くまモン体操」をしました。くまモンは覚えた手話「くまもと」「おいしい」「うれしい」「ありがとう」「みなさん」等、披露してくれました。残念ながら、手が短くて「うま」の手話ができませんでした。大会に参加していた子供達も大喜びしました。

3 九州学院中学高等学校チアダンス部

若さあふれるダンスを披露してくれました。今年もチアダンスの全国大会に出場し全国大会出場常連校となりました。全米大会を目指して日々練習に励んでおられます。「笑顔」をモットーに、皆さんに元気を与えるダンスを、これからも目指してってください。

10日の大会会場では九州全県からたくさんの参加者が集まり、あちこちで「久しぶり」「元気だった？」という手話が見られました。壇上におられる方々、会場から壇上を見つめておられる方々から、この大会に対する熱い思いが感じられました。

【熊本（菊池わかぎ） 齋藤】

編集後記

「はっけん」発行にあたり、各県から原稿を執筆していただきました。快く執筆をお引き受けいただいた会員の皆様、どうもありがとうございました。併せて、個人的な都合により発行が遅くなりましたことをお詫びいたします。

私自身は、研修会及び大会当日は、係があったため講演を聞くことはできませんでしたが、報告を読み、充実した二日間だったことが伝わってきました。

サークル活動のあり方について、どのサークルも悩み、試行錯誤されていることと思います。聞こえない人とともにある手話サークルの方向性のヒントが、この報告の中からも読み取れるのではないのでしょうか。

「はっけん」を読まれた感想や、疑問点などあれば、ぜひ九手連ホームページ「掲示板」・「足あと」のコメント、もしくは各県の通信員さんへご連絡ください。本「はっけん」が、各会員さん同士をつなぐきっかけになれば幸いです。

九州手話サークル連絡協議会

(事務局)

〒861-0143 熊本県熊本市北区植木町大和 34-2

森 保夫

発行責任者：青山寛六

広報担当者：吉野綾（熊本）

発行年月日：平成29年11月